

陶淵明「帰去来兮辞」における「松菊」の表現について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 増野, 弘幸 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6090

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



陶淵明「帰去来兮辞」における「松菊」の表現について

増 野 弘 幸

はじめに

陶淵明の作品には多くの植物が登場するが、「帰去来兮辞」には次の様な表現がある。

三逕就荒、松菊猶存。

(三逕は荒に就けども。松菊猶ほ存す。)

県令の職を辞し、隠棲を決意して自宅に戻った時の様子を述べているが、家族との再会を喜ぶ中、門に入ると庭は荒れているが、松と菊はまだ残っていた、と言う。

ここでの「松」、「菊」は陶淵明の他の作品にも登場するものであり、本稿ではその二種類の植物が、ここで「松菊」と纏めて表現されている意味について考えてみたい。

一、「歸去來兮辭」での「松」と「菊」

改めて「歸去來兮辭」の該当部分を示すと次の様になっている。

乃瞻衡宇、載欣載奔。僮僕歡迎、稚子候門。三逕就荒、松菊猶存。携幼入室。有酒盈罇。引壺觴以自酌。眄庭柯以怡顏。

（乃ち衡宇を瞻て、載ち欣び載ち奔る。僮僕歡迎へ、稚子門に候つ。三逕は荒に就けども。松菊猶ほ存す。幼を携へて室に入れば、酒有りて罇に盈つ。壺觴を引きて以て自ら酌み、庭柯を眄ては以て顔を怡ばす。）

ここでは、彭沢の県令の職を辞して船旅の後に自分の家に帰りつき、船着場から喜びながら走り戻ると、召使いや子供達の出迎えを受け、自宅の門に入ると、まず、荒れた庭の中に松と菊だけが残っている様子が目に入る。子供達を連れて部屋に入ると酒が用意されており、それを飲みながら庭の木の枝ぶりを見て自宅に帰った喜びを感じる。

この様に、自宅に落ち着く様子を述べる中、庭にある植物として「松」と「菊」のみ名前が具体的に挙げられ、他は「庭柯」とあるのみである。

引用した部分の後に続く部分で植物が登場するのは次の二箇所である。

・撫孤松而盤桓（孤松を撫して盤桓す）

・木欣欣以向榮（木は欣欣として以て榮に向かふ）

ここでも、「松」が示される以外は、単に「木」と述べられているだけである。従って、陶淵明はこの「松」と「菊」に特別な思いを込めていると考えて良いと思われる。

「松」、「菊」それぞれに自らの、俗世とは隔絶した高潔さを示す比喩物としての用法があり、荒れた庭が役人生活に疲れ

た陶淵明の精神状態を表し、「**歸去来兮辞**」の場合、そこに残された「**松菊**」が俗世から離れて高潔に生きようとする志の象徴であることは既に論じたことである^①。

そこで陶淵明における「**松**」、「**菊**」二種類の価値的な差異について見てみると、この二つを並べて述べる例としては、「**和郭主簿**（郭主簿に和す）」其二が挙げられる。

芳菊開林耀 芳菊林を開き耀き

青松冠巖列 青松巖に冠して列す

懷此貞秀姿 懷ふ此の貞秀の姿

卓為霜下傑 卓として霜下の傑たるを

芳しき菊はまるで林を切り開いたかの様に咲き耀き、青々とした松は崖の上に並んでいる。これら菊と松の節操秀れた姿が霜枯れの風景の中で抜きん出たものとなっていることを思うと言うが、陶澗はこれについて次の様に述べる。

蓋謂千載幽人、無不抱此松菊之操。

（蓋し謂ふ千載の幽人、此の松菊の操を抱かざるは無し。）

ここでは「**松**」と「**菊**」は、隱者の抱く節操高き志を示すものと指摘している。

この様に、陶淵明は「**松**」と「**菊**」それぞれに対して、等しく自らの節操高き高潔な志を示すものと認識していたと言えるのであり、「**歸去来兮辞**」における「**松菊**」にもまた、同様の価値観が込められていると言えよう。

二、「**松**」、「**菊**」の組み合わせについて

次に、「**松**」、「**菊**」それぞれに組み合わせられる植物について、陶淵明の用例を除いて、東晋以前の文献の用例を見てゆき

たい。まず、「松」と「菊」の組み合わせ以外の例を見てみると、「松」については「柏」と組み合わせることが非常に多く、例えば魏の劉楨の「贈從弟三首（從弟に贈る三首）」の第二首には次の様にある。

豈不羅凝寒 豈に凝寒を羅らざらんや

松柏有本性 松柏本性を有つ

ここでは、厳しい寒さを受けても松柏は本性を変えない、と松柏の強さを述べる。これについて『文選』所収のこの詩の李周翰の注では次の様に述べる。⁽²⁾

人心堅貞、亦当如此終世不改易。

（人心堅貞なれば、亦た当に此の如く終世改易せざるべし。）

ここでは、人の心が堅く正しければ、状況の悪い中でも志を曲げないことを喩えているとしている。

また、魏の王昶の「家誠」では次の様に述べられている。

夫物速成則疾亡。晚就則善終。朝華之草。夕而零落。松柏之茂。隆寒不衰。

（夫れ物の速成なるは則ち疾亡す。晚就なれば則ち善く終はる。朝華の草、夕にして零落す。松柏の茂、隆寒にも衰へず。）

遅くじつくりと出来たものは松柏の如くにいつまでも廃れることのないものであると、松柏の不変性を用いて述べている。

他の「松」との組み合わせとしては「梧」、「竹」、「蘭」（フジバカマ）等の例はあるが、「竹」は二例、他はいずれも一例である。この中で「蘭」は草であり、木と草との組み合わせはこの一例のみである。

また「菊」については、「蘭」との組み合わせが殆どで、例えば漢の武帝の「秋風辞」には次の様にある。

蘭有秀兮菊有芳。懷佳人兮不能忘。

（蘭に秀でたる有り菊に芳しき有り。佳人を懐ひて忘るる能はず。）

ここでは、「蘭」と「菊」の高潔なイメージを用いて、「佳人」すなわち臣下たちの徳の高さを比喩的に示している。

また、西晋の左思の「招隱詩二首」其一には次の様に述べられている。

秋菊兼餼糧 秋菊は餼糧を兼ね

幽蘭間重襟 幽蘭は重襟に間ふ

躊躇足力煩 躊躇して足力煩ふ

聊欲投吾簪 聊か吾が簪を投ぜんと欲す

ここでは、隱士を訪ねてゆき、その超俗の環境に触れて自らも職を擲ち此処に留まりたいとの気持ちを書いてあるが、『文選』所収のこの詩の李善注では『楚辭』離騷を引用して次の様に説明している。^③

楚辭曰、朝飲木蘭之墜露、夕餐秋菊之落英。〔中略〕紉秋蘭以為佩。然蘭可為佩、故以間襟也。

（楚辭に曰く、朝に木蘭の墜露を飲み、夕に秋菊の落英を餐ふ。〔中略〕秋蘭を紉けて以て佩と為す。然らば蘭は佩と為すべくして、故に以て襟に間ふ。）

「離騷」では「菊」を食べたり「蘭」を身に着ける表現で自らの高潔さを表現しているが、李善は、この「招隱詩」においても、これに基いた表現がなされていると指摘している。

他の「菊」との組み合わせとしては「蘅」（カンアオイ）に一例がある程度である。

この様に、「松」であれば「柏」、「菊」であれば「蘭」という様に、木なら同じ木、草ならば同じ草との組み合わせが通例となっている。

従って「松」と「菊」との組み合わせは、木と草との組み合わせで、通例での発想としては、あまり例が見られないものと言える。

「松」と「菊」との組み合わせの例としては、次の二例のみが挙げられる。
後漢の杜篤の「鬱金賦」には次の様にある。

衆華爛以俱發、鬱金邈其無双。比光榮於秋菊、育英茂乎春松。

（衆華爛として以て俱に發くに、鬱金邈かに其れ無双なり。光を比すれば秋菊よりも榮え、育しき英は春松よりも茂る。）

ここでは、夏四月の鬱金の花の美しさを強調するため「菊」、「松」と比べている。

また、魏の曹植の「洛神賦」には次の様にある。

其形也、〔中略〕榮曜秋菊、華茂春松。

（其の形や、〔中略〕榮は秋菊よりも曜き、華は春松よりも茂し。）

ここでは、洛水の神である宓妃の美しさを述べているが、『文選』李善注では前出杜篤の「鬱金賦」がこの表現の出典であると指摘し、同じく張銑の注では次の様に言う。⁴⁾

秋菊春松其盛而神女榮茂過之。

（秋菊春松其れ盛なるも神女の榮茂之に過ぐ。）

この様に、神女の美しさを「菊」、「松」と比較して述べている。

以上、二例の表現では、美しさを比較するものとして「松」と「菊」が用いられているのであり、これらを組み合わせ用いて高潔さを述べようとする陶淵明の用法とは異なっているのである。

次に、「歸去來兮辭」にある「松菊」の語について考えてみたい。

ここで、「松菊」という、「松」と「菊」とを一語として言う用例について、陶淵明より以前のものを見てみると、この二種類の植物名を直接に組み合わせた例は、この「歸去來兮辭」の他は、同じく東晋の郭元祖の、『列仙伝』の文賓の条に

対する「讚」の部分に一例見られるのみで、それ以前には「松菊」の用例は全く見られない。

郭元祖の例は次の様なものである。⁽⁵⁾

松菊代御、鍊質鮮膚。

（松菊代はるがはる御し、質を鍊り膚を鮮にす。）

ここでは『列仙伝』において文賓の離縁した妻が九十一歳の老婆になり文賓に再会した所、文賓自身は若々しさを保っており、老いた妻に延命のため、菊の花や桑に寄生する松の実等を服用することを教えたことを四字句に纏めて言っている部分で、特に松と菊とを意図的に一語にしているものではない。⁽⁶⁾

従って「婦去来兮辞」に現れた「松菊」の語は陶淵明が初めて用いた独自の表現と言える。

以下で、自らの高潔さを表現するために「松」と「菊」とを初めて組み合わせ、更には「松菊」という独自の表現を作出した陶淵明の意図について考えてみたい。

三、「松」、「菊」の先行用例

まず「松」について、高潔さや高い志等、比喩的な意味が込められていると考えられる古い用例を求めてみると、『詩経』天保には次の様にある。

如松柏之茂 松柏の茂るが如く

無不爾或承 爾に承くる或らざるは無し

ここでは天から降る福祿が増して、長く子孫にも及ぶことを言うが、その「鄭箋」には次の様に言う。

如松柏之枝葉、常茂盛青青相承、無衰落也。

陶淵明「婦去来兮辞」における「松菊」の表現について

（松柏の枝葉の、常に茂り盛んにして青青として相承け、衰落無きが如し。）

ここでは松柏が常に青々としていて、福祿が長く引き継がれてゆくことを表すとしている。

また、同じく『詩経』斯干には次の様にある。

如竹苞矣 竹の苞るが如く

如松茂矣 松の茂るが如し

この部分について「鄭箋」には次の様に言う。

言時民殷衆、如竹之本生矣。其俊好、又如松柏之暢茂矣。

（言は時の民、殷衆なること竹の本の生ゆるが如し。其の俊好なること、又松柏の暢び茂るが如し。）

ここでは、周の宣王が新たに宮殿を築き、「鄭箋」によれば、民が、竹の根の如く増え、松柏が伸び茂る様に優れて良くなつてゆくと述べている。

この様に、春秋時代に纏められた中国最古の詩集である『詩経』の段階で、「松」は幸福を示したり、良きものとしての意識があつたことが理解されるが、『書経』等においては、単に樹木の名として示されるに過ぎない。

この良きものとしての「松」の認識が、陶淵明の用いた意味に重なるのは、『論語』になつてからである。

『論語』子罕には次の様にある。

子曰、歳寒、然後知松柏之後凋也。

（子曰く、歳寒くして、然る後に松柏の凋むに後るを知る。）

所謂「後凋の節」として知られている部分であるが、冬枯れの時期になつて初めて松柏だけがいつまでも枯れずに青さを保つことで、優れた人物だけが周囲の状況に左右されることなくいつまでも高い志を保つものだと述べている。

次に「菊」について見てみると、文献上初めて現れるのが『楚辞』である。

『楚辞』九章・惜誦には次の様にある。

播江離与滋菊兮、願春日以為糗芳。

（江離と滋菊とを播き、春日以て糗^{きう}芳と為さんことを願ふ。）

これについて後漢の王逸は次の様に述べる⁸⁾。

言己乃種江離蒔香菊、采之為糧、以供春日之食也。

（言は己乃ち江離を種を香菊を蒔き、之を采り糧と為し、以て春日の食に供せんとす。）

また、宋の洪興祖は、この部分の「補注」で、この事について次の様に言う。

江離与菊以為糗、取其芳香也。

（江離と菊と以て糗^{きう}と為すは、其の芳香を取ればなり。）

この様に、本文で、江離（センキュウ）と菊を播いて、春の食糧としたいと述べていることについて、洪興祖は江離と菊を糗^{はしい}にするというのは、その香り高い点を用いているのだと説明する。

「惜誦」のこの部分は王に忠誠を尽くしても理解されず、そうした状況から身を引いて一人高潔さを守ろうとする部分での表現であり、この江離と菊は実際に糗にするのではなく、『楚辞』では香草を用いて自らの高潔さ、潔白さを表現するこ
とが多い点からも、洪興祖の述べる様に、この表現によって自らの高潔さを示そうとしているものだと言えよう。

また、同じく『楚辞』離騷には次の様にある。

夕餐秋菊之落英。

（夕に秋菊の落英を餐ふ。）

『文選』所収のこの作品における張銑の注には次の様に述べる⁹⁾。

食秋菊之花者、取其香潔以合己之徳。

（秋菊の花を食らふは、其の香潔なるを取り以て己の徳に合す。）

ここでは、秋の菊を食べるのは、花の香り高く清らかなイメージを自分の徳と重ねていると説明している。

この表現においても、実際に食べるかは別として、菊を食べるという表現によって、自らの高潔な徳を重ね合わせて示しているのである。

以上の様に、「松」が高い志を守る意味合いを持つのは、『論語』が濫觴となっており、「菊」が高潔さを示す比喩物となったのは、『楚辞』に由来しているのである。

四、陶淵明の「松」、「菊」と『論語』、『楚辞』

そこで、陶淵明の作品における「松」、「菊」と、『論語』、『楚辞』の前述の表現との関係について見てゆきたい。まず、「松」についてであるが、陶淵明の作品中、九作品に見えている。

「飲酒」其八には次の様にある。

青松在東園 青松東園に在り

衆草没其姿 衆草其の姿を没するも

凝霜殄異類 凝霜異類を殄くさば

卓然見高枝 卓然として高枝を見す

青い松が庭の東側にあり、多くの雑草がその姿を覆い隠しているが、厳しい霜がそれら雑草を枯らせば、その高い枝を持つ姿を現わすと言う。雑草が高い枝を持つ松を覆い隠すことは現実には不可能であるが、その様な表現によって松の存在を際立たせる効果を狙ったものである。

ここでは、実際に陶淵明の自宅の庭にある一本だけ生えている松の姿を述べているが、この詩の最後の二句では俗世との関わりの無意味さが述べられている点から見て、呉瞻泰等諸家の指摘する如く、この一本だけ生えている松は、孤高を保とうとする陶淵明自身の象徴であると言える。⁽¹⁰⁾

この詩の、他の草が枯れて卓然と姿を現す松について古直は次の様に指摘し、他の注釈もその見解を支持している。⁽¹¹⁾

直案此所謂歲寒然後知松柏之後凋也。

(直案ずるに此れ所謂歳寒くして然る後に松柏の凋むに後るるを知るなり。)

この様に、この詩の松の表現は、『論語』を典故としたものである。

また、前出の「和郭主簿」其二にある「松」と「菊」に対する陶淵明の評価である「懷此貞秀姿、卓為霜下傑」の表現も同様に、厳しい時期でも高い節操を保ち高潔に生きるという陶淵明の意志を、『論語』の表現を下敷きにして示したものである。⁽¹²⁾

「飲酒」其四には次の様に述べられている。

栖栖失群鳥 栖栖たり群を失ひし鳥

日暮猶獨飛 日暮れて猶ほ独り飛ぶ

〔中略〕

因值孤生松 孤生の松に値ふに因り

斂翻遙來歸 翻を斂めて遙かに来り歸る

勁風無榮木 勁風に榮木無きも

此蔭獨不衰 此の蔭独り衰へず

託身已得所 身を託するに已に所を得たり

陶淵明「歸去來兮辭」における「松菊」の表現について

千載不相違 千載相違らず

群れからはぐれた鳥が止まるべき所を求めるが、たった一本生えている松を見つけ宿る場所として戻って来た。冬の強い風に花の咲く木も無いが、松だけはその様な寒さでも枯れることも無い。身を託する所を見付けたのだ、千年経っても去ることは無いと述べている。

この鳥が陶淵明自身を指していることは既に論じた事だが、一本の松は自宅の庭の松であり、鳥は止まるべき所を探し求めていると述べているが、松に止まる部分で「来帰」の語を使った点も、自身が俗世を離れ自宅での本来の生活に戻った意を込めたための表現である。ここでも、冬の寒さにも枯れない松で、厳しい状況でも自分は志を変えないことを示すという、『論語』由来の言い方を用いている。

先に示した「帰去来兮辞」の「撫孤松而盤桓」の表現も、以前に論じた如く、孤高を保ちながら生きてゆくことを表明している陶淵明自身の比喩的表現であり、ここでの「孤松」は、志を貫くことを示すものである。これも『論語』由来の表現と理解出来るよう。

また、「擬古」其五には次の様な部分がある。

青松夾路生 青松路を夾みて生じ

白雲宿簷端 白雲簷端に宿る

〔中略〕

願留就君住 願はくは留まりて君に就きて住み

従今至歲寒 今より歳寒に至らん

東方に住む隱者の家を探ねて行くと、その道には松が茂り、白雲が軒端にかかることを言い、その場所の高潔さを「松」と「白雲」とで示し、自分もそこに寒くなる時期まで住みたいと述べる。

この詩の「歳寒」の語については古直、楊勇等が『論語』子罕に基いた表現であると指摘しており、自らの高い志を最後まで守ろうとする陶淵明の意志を表したものと考えられよう。

この様に、「松」の語を用いる場合、また、自らの志を表明する場合、陶淵明は『論語』子罕由来の表現を用いることが多いのである。

次に「菊」については、陶淵明の作品中、五作品に見えているが、「飲酒」其七に次の様にある。

秋菊有佳色 秋菊佳色有り

裛露掇其英 露に裛^{うつら}ふ其の英を掇る

汎此忘憂物 此の忘憂の物に汎かべ

遠我遺世情 我が世を遺るるの情を遠くす

色鮮かに咲く露に濡れた菊花を摘んで酒に浮かべて飲めば、俗世からより遠く気持ちが離れてゆく、と自宅で寛いで酒を飲んでゐる様子が述べられている。

これについて、古直は、先に示した『楚辞』離騷の「夕餐秋菊之落英（夕に秋菊の落英を餐ふ）」をその典拠として挙げている。¹⁵ 前出の『文選』張銑の注では、秋の菊を食べるのは、花の香り高く清らかなイメージを自分の徳と重ねてしていると説明していたが、「飲酒」其七の場合においても同様であり、『楚辞』に基いての表現が行われているのである。

また、「飲酒」其五には次の様な表現がある。

采菊東籬下 菊を采る東籬の下

悠然見南山 悠然として南山を見る

菊を庭の東側の籬の下で摘み、ゆったりとした気持ちで廬山を眺めることを言う。

『文選』所収のこの詩の呂向の注では次の様に述べている。¹⁶

陶淵明「歸去來兮辭」における「松菊」の表現について

菊香草黄華、可以泛酒。

（菊は香草にして黄華、以て酒に泛かぶべし。）

菊は香り高い草で黄色の花をつけ、酒に浮かべることが出来る、と菊を採るのは酒に浮かべる為の行為とし、「飲酒」其七の表現と類似のものと解し、王瑶も、菊を食べると寿命が延びると伝えられており菊を採るのは食べる為であるとし、襲斌もこれを是としている。⁽¹⁸⁾

実際に食べるかは別として、この表現も前掲の『楚辞』の表現に基いたもので、自らの高潔さを示す表現と解することが出来る。

この様に、陶淵明が「菊」により自らの高潔さを述べる時、そうしたイメージの源泉となっている『楚辞』の表現を意識しているのである。

五、「松菊」と纏める意味

以上、見て来た如く、「松菊」の語は、「松」は『論語』、「菊」は『楚辞』に由来するものであった。それでは何故それらの語を繋げて一つの表現とし、自らの高い志や高潔さを表現したのであろうか。

陶淵明の属する階級であり、政治の中心を担っていた士大夫層においての教育は、当時の玄学の隆盛はあったものの、それには関係無く、その基礎は儒家の教育に置かれていた。

『三国志』卷二十八魏書鍾会伝における裴松之注所引の、鍾会所作の母の伝には次の様にある。

年四歳授孝経、七歳誦論語、八歳誦詩、十歳誦尚書、十一誦易。

（年四歳にして孝経を授け、七歳にして論語を誦せしめ、八歳にして詩を誦せしめ、十歳にして尚書を誦せしめ、十

一にして易を誦せしむ。）

ここでは、鍾会に対して母親が四歳の頃より儒家の經典を勉強させていた事が述べられており、七歳の時には、『論語』を暗誦させている。

この様に儒学が振るわなかった時期であっても儒家の經典を幼少期より学ばせていたのであり、吉川忠夫は、士大夫の教養の基礎は儒家の思想であり、この点においては、漢代との相違は無かったと述べている。⁽¹⁹⁾

この点について、陶淵明も「飲酒」其十六において、若い頃を振り返って次の様に述べる。

少年罕人事 少年より人事罕にして

游好在六經 游好は六經に在り

行行向不惑 行き行きて不惑に向んとするに

淹留遂無成 淹留して遂に成る無し

竟抱固窮節 竟に固窮の節を抱き

飢寒飽所更 飢寒は更し所に飽く

若い頃から俗世との関わりは非常に少なく、好んで親しんだのは六經であつた。四十歳になろうとするに、ぐずぐずと進まず何事も成し遂げられなかった。結局は「固窮の節」を抱き続けて、飢えと寒さを飽きるほど味わつた、と言う。

ここで言う「六經」は儒家の經典を指し、陶淵明も若い頃から、他の、同じ階層の人々と同様に、儒家の学問修養に励んだことが述べられている。

その後にある「固窮の節」とは『論語』衛靈公の次の表現に基いた言葉である。

子曰、君子固窮。小人窮斯濫矣。

（子曰く、君子固り窮す。小人窮すれば斯に濫る。）

陶淵明「歸去來兮辭」における「松菊」の表現について

孔子の言葉として、君子であっても、もちろん困窮することはあるが、小人の場合は困窮すると取り乱して正しい生き方、考え方が出来なくなるとするもので、「困窮の節」は困窮に屈せず高く節操を守るところを示す言葉である。ここでは、儒家の学問修養に励んだ結果、身に付いたのは、この、どのような困窮状態になろうとも節操を守る気持ちであることを述べているのである。

この「困窮の節」の言葉は、単に「困窮」とあるものも含めて他の五作品にも用いられ、「後凋の節」に基いた「松」の用例と共に、陶淵明が『論語』に示された生き方を多分に意識していたことを示すものである。

以上の事から陶淵明における「松」は、儒家の教養を身に付けた士大夫層として、高潔に生きようとする自らの信念を孔子の示したあり方によって守ろうとする自身の矜持を示すものであると言えよう。

「菊」について、高潔さのイメージは『楚辞』に由来することを述べたが、『楚辞』に由来する表現は「菊」以外にも陶淵明の作品中に散見される。

前引の「飲酒」其十六の「淹留遂無成」の表現については、『楚辞』九弁の次の様な表現に基いている。

蹇淹留而無成。

〔王逸注〕雖久寿考、無成功也。

（蹇として淹留して成す無し。〔王逸注〕寿考を久しくすと雖も、功を成す無し。）

ここでは、王逸の注を参考にすれば、長生きしているが、滞って何事も成し遂げることは無かったことを言っている。

また、これも前に引いた「飲酒」其八の「凝霜殄異類」の「凝霜」の語は、袁行霈の指摘によれば、『楚辞』九章・悲回風の「湫凝霜之雰雰（凝霜の雰雰たるに湫ぐ）」に基いたものである。⁽²¹⁾

また、襲斌は、「閑情賦」における「栖木蘭之遺露（木蘭の遺露に栖ふ）」の部分は、『楚辞』離騷の「朝飲木蘭之墜露兮（朝に木蘭の墜露を飲む）」に基いた表現であると指摘している。⁽²²⁾

この様に、『楚辞』に基いた表現が散見されることは、陶淵明が作品を作る上で『楚辞』の存在を強く意識し、その表現を利用することを考えていたことを示しているが、これは、陶淵明の居住していた場所が、古くは楚の地方であったことに由来していると考えられる。

「帰園田居」其一には次の様にある。

少無適俗韻 少きより俗に適うの韻無く

性本愛邱山 性 本 邱山を愛す

ここでは、若い時から俗世と上手くやれる性格ではなく、本来の性格として自然を好んでいた、と述べるが、こうした事について上田武、田部井文雄は、「江州の美しい自然と田園の風景な心のよりどころとして成長してきたこと」を顧みて言ったものと指摘している。²³⁾

陶淵明は二十九歳から四十一歳までの役人生活と辞職を繰り返した時期でも、常に故郷に帰ることを望んでいた。

例えば、三十六歳の時、桓玄の幕僚として都に赴き、その帰途、故郷に向かい、暴風で規林という所で先へ進めなくなつた時の作である「庚子歳五月中、従都還阻風于規林（庚子の歳五月中、都より還るに風に規林に阻まる）」其二では次の様に述べている。

静念園林好 静かに念ふ園林の好きを

人間良可辞 じんかんよこと 人間良に辞すべし

静かに故郷の田園や林の素晴らしさを考えていると、俗世の役人生活など辞めるべきだとつくづく思う、と述べ、故郷への強い愛着を表現している。

また、陶淵明の家系は、この南方を本拠とする一族であった。長男に命名する詩、「命子（子に命す）」の中では、東晋王朝設立時の功臣で曾祖父の陶侃等、一族の系譜が誇りをもつて語られている。

陶淵明における故郷に対する強い愛着心は、本来的に持っていた故郷の美しい自然に対する愛着と、この地方を本拠とする一族出身であることの誇りとが相俟って形成されていると考えられる。

こうした故郷への強い愛着心を抱く陶淵明が、作品中に『楚辞』の表現を散見させていることは、やはり『楚辞』を郷土の文学として身近に感じ、重視していた結果に他ならないと言えよう。

まとめ

先程引用した「命子」には、次の様な部分がある。

名汝曰儼 汝に名づけて儼と曰ひ

字汝求思 汝に求思と字せん

〔中略〕

尚想孔伋 尚ほ想ふ孔伋を

庶其企而 庶はくは其れ企てよと

ここでは、孔子の孫である孔伋の字「子思」を追い求めよとの意を織り込んで、長男に「求思」という字を付け、孔伋の様になって欲しいとの願いを述べている。これも、陶淵明が孔子を如何に尊崇していたかが窺える表現である。

「歸去來兮辞」における「松菊」という陶淵明が作り出した表現には、「松」の部分では、士大夫層として儒家の教養を持ち、孔子を尊崇しながら、どの様な状況になっても、高潔に生きようとする自らの信念を、孔子の示すあり方で守ろうとする高い志が示され、「菊」の部分では、愛着ある郷土の文学である『楚辞』にある菊のイメージを用いて高潔さが示されているのである。

「松菊」の語は、陶淵明の思想的信条と居所への愛着とを背景に、その志を端的に示すために作り出された表現なのである。

注

- (1) 拙稿「陶淵明における庭の表現について」『新しい漢字漢文教育』三十五号。
- (2) 『六臣註文選』卷二十三。
- (3) 『六臣註文選』卷二十一。
- (4) 『六臣註文選』卷十九。
- (5) 『列仙伝』卷下（『正統道蔵』洞真部・記伝類（新文豊出版公司、一九七七年））。
- (6) 注(5)の『列仙伝』の本文は以下の如くである。「文賓者太邱鄉人也。売草履為業。数取嫗数十年輒棄之。後時故嫗寿老年九十余続見賓年更壯。他時嫗拜賓涕泣。賓謝曰不宜至正月朝儻能会郷亭西社中邪。嫗老夜從兒孫行十余里、坐社中待之。須臾賓到大驚、汝好道邪。知汝爾前不去汝也。教令服菊花地膚桑上寄生松子取以益氣。嫗亦更壯復百余年云。」
- (7) 「岱畎糸、泉、鉛、松、怪石。」（『書経』夏書・禹貢）。
- (8) 『楚辞章句』卷第四。
- (9) 『六臣註文選』卷三十一。
- (10) 呉瞻泰『陶詩彙注』卷三「此借孤松為己写照也。」（『陶淵明詩文彙評』〔台湾中華書局、一九七四年〕所引参照）。
- (11) 古直『陶靖節詩箋』卷三（広文書局、一九九〇年）。楊勇の『陶淵明集校箋』はこの説を引用している（正文書局、一九八七年、一五〇頁）。
- (12) 拙稿「陶淵明の詩における鳥の表現について」『大妻女子大学紀要—文系—』二十七号。
- (13) 前掲注(1)。
- (14) 古直前掲書卷四。楊勇前掲書一九三頁。
- (15) 古直前掲書卷三。

陶淵明「歸去來兮辭」における「松菊」の表現について

- (16) 『六臣註文選』 卷三十。
- (17) 相伝服菊可以延年、采菊是為了服食。(王瑤『陶淵明集』(人民文学出版社、一九九〇年) 五一頁。
- (18) 襲斌『陶淵明集校箋』(上海古籍出版社、一九九九年) 二二一頁。
- (19) 吉川忠夫『六朝精神史研究』 東洋史研究叢刊之三六六(同朋舎、一九八六年) 一三三頁。
- (20) 他の作品は以下の如くである。「癸卯十二月中作与從弟敬達」、「飲酒」其二、「有会而作」、「詠貧士」其七、「感士不遇賦」。
- (21) 袁行霈『陶淵明集箋注』(中華書局、二〇〇三年) 二二五頁。
- (22) 襲斌前掲書三八七頁。
- (23) 上田武、田部井文雄『陶淵明集全釈』(明治書院、二〇〇一年) 三八四頁。